

沼津市大平の民俗的世界

福田 ア ジ オ

はじめに

一 大平の集落と村落

二 『大平年代記』の世界

三 村落空間と民俗

四 民俗の示す歴史

論文要旨

本稿は、今回の研究計画の定点調査地の一つである静岡県沼津市大平において継続的な調査を行なってきた結果の報告である。個別地域の個性は、自らの地域の歴史認識によって大きく支えられ、あるいは形成されるものと予想しつつ、調査を行なった。人々の自分たちの社会に対する認識が歴史を作り出すと言ってもよいであろう。史実としての歴史だけでなく、意識される歴史、あるいは時には作り出される架空の歴史的世界も含めて、民俗的歴史世界を文字資料と現実の民俗事象の双方から追いかけることを意図した。

幸いにして大平には前者の問題を究明するに適う年代記という興味深い人々の作り出した歴史書がある。大平を対象村落としたのも、この年代記が存在したからである。調査はこれを基点にして、その内容と現実の豊富な民俗との関わりを考察することに主眼を置いた。なお、大平の民俗については、本調査とほぼ同じ時期に並行して別の調査が実施され、民俗誌の形式での調査報告書が刊行されている（静岡県史民俗調査報告書『大平の民俗』）。本稿

では、それとの重複をできるだけ避けて、大平の民俗的な特質を把握すべく内容を絞ったので、大平の具体的な民俗については網羅的には記述していない。

大平の民俗的特質は以下のように理解することが可能であろう。大平の開発過程とその後の狩野川との戦いの連続が、大平の現在まで伝承されてきた民俗を作り出したと言えよう。道祖神祭祀自体は駿東から伊豆に大きく展開しているものであり、大平もその分布地域内の一村落到過ぎない。また道切り行事も全国的に行なわれているもので珍しいものではないし、大平のように札を笹竹に挟んで立てることもごく一般的な姿である。しかし、その道祖神祭祀や道切り行事を夏に重点を置いて行なっているのは必ずしも一般例とは言えない。大平が開発形成過程で背負った条件がこのような特色ある領域をめぐる民俗を作り出し、維持させてきたものと理解できる。そして、その歴史の重みが現在なお近隣の諸村落では見ることのないほどの熱心さでこの二つの民俗を保持しているのであろう。

はじめに

確立期の柳田國男の民俗学理論では、日本の各地で展開している生活の地域差はもともとのものではなく、一つの歴史の流れのなかのそれぞれ一駒を示しているものと理解していた。地域差そのものに大きな意味を見出さず、歴史の各段階、あるいは変遷過程を把握するための手段として地域的相違を利用したに過ぎないといっても過言ではないであろう。そのため、地域の個性は無視された。何処でも同じ歩みをして次第に変化し変遷していくものと考え、その地域差から変遷過程を再構成するための指標として、それぞれの姿の分布の相違に注目した。そして、周知のように、中央のものほど新しく、中央から離れた遠くに分布するものは古い姿を示しているとした。その枠組みを明確な仮設として提示したのが有名な周圏論である。このような日本全体を一つと見る考えは、偏狭な郷土意識やお国自慢的な理解を批判し、ナショナルな見方に立つことになり、決して無意味な観点や仮設ではなかった。しかし、この立場は個別具体的に活きて暮らしている人々の生活を大きな器のなかに入れてしまい、その個性を見失わせ、人々の自らの努力や工夫を評価しない傾向を生み出したといえないであらうか。個々の地域の民俗は、所詮中央から伝播してきたものであり、個別地域はそれを受容してきたに過ぎないという無気力な位置付けにならざるをえないのが、柳田國男の周圏論であった。⁽¹⁾

初期の柳田國男にあっては、日本中がどこでも同じ歩みをするとは思っていなかった。個別の地域にはそれぞれの歴史があり、それは何時までも個性を持ち続けて存続するものだと考えていた。初期柳田の研究課題であった山人論や漂泊の宗教者たちについての研究もそうであったが、古くから親しまれている村落類型論もそのような視点が貫かれた論考であった。⁽²⁾ それらの研究を通して、柳田は地域で暮している人々の創意と工夫を重視し、その個性を明らかにすることこそが必要だと考えていたし、さらにそれらを通して日本のそのときの状況に対して一定の主張をしようとしていた。いわば危機意識の表明であった。ところが、民俗学は、経世済民の学として柳田國男によって作り上げられながら、その後その初志を忘れてしまった。民俗の地域差と地域性を調査して何を明らかにするのかについても、民俗学の理念や方向との関連で議論されねばならないが、その方向での研究成果は乏しい。具体的な民俗事象の各地の相違に注目し、その相違のなかに古いものを探すことだけに注意が向けられてきた民俗学の「伝統」は近年の動向のなかでも十分に克服されてはいない。近年の社会の動向は、世界的な規模でナショナルなレベルに意識も行動も収斂する動きが顕著であるが、それを反省し、あるいは批判する視点を民俗学が提示することは、地域の人々の生活文化の調査研究をしてきた学問として必要なことである。それは個別地域で活きてきた人々の個性的な努力と工夫を確認し、日本はどこでも同じという常識や通念を打ち破ることで果たされる。初期の柳田國男の研究を再評価し、その視点に学びつつ、民俗の地域における特質について考えること

としたい。

本稿は、定点調査地の一つである静岡県沼津市の大平において、以上のような問題意識に基づいて継続的な調査を行ってきた結果の報告である。個別地域の個性は、自らの地域の歴史認識によって大きく支えられ、あるいは形成されるものと予想しつつ、調査を行なった。人々の自分たちの社会に対する認識が歴史を作り出すと言ってもよいであろう。史実としての歴史だけでなく、意識される歴史、あるいは時には作り出される架空の歴史的世界も含めて、民俗的歴史世界を追いかけてみたい。幸いにして大平にはそれに適う年代記という興味深い人々の作り出した歴史書がある。『大平年代記』⁽³⁾がそれである。今回の民俗の地域差と地域性の研究においてこの大平を対象村落としたのも、『大平年代記』という資料が存在したからである。調査はこれを基点にして、その内容と現実の民俗との関わりを考察することに主眼を置いたが、成功したとは言えない中間報告である。なお、大平の民俗については、本調査とはほぼ同じ時期に並行して別の調査が実施され、民俗誌の形式での調査報告書が刊行されている。⁽⁴⁾筆者もその調査に参加し、一部を執筆している。本稿では、大平の民俗的な特質を把握すべく内容を絞ったので、大平の具体的な民俗全般については記述していない。本報告と併せて、そちらの民俗調査報告書を参照してくださいようお願いしたい。

一 大平の集落と村落

(一) 小宇宙の大平

沼津市大平は一つの大字であるが、その領域は広い。大平は近世の支配単位としての大平村の領域に一致する。その近世の村の範囲が沼津市に合併するまで一つの村として行政的に存在してきたことが示すように、明治町村制のもとで一つの独立した単位として認められる程に広大である。それは実際に大平を歩いてみればすぐに分ることである。大平の領域を、家々を巡る形で歩こうとすると大変な時間が必要とする。

大平は南方に山を背負っている。その山は高くはないが、急峻であり、南側の江浦の海岸部との交通を遮断している。かつては山越の道が何本もあったが、今ではどれも使用されていない。その山なみは大平を包むように東西にまわっている。そして、大平の北方は狩野川によって遮られている。現在は河川改修によって川の流れは直線状となり、両側には堤防が高く築かれている。しかし、かつては狩野川は蛇行して流れていた。現在もその蛇行の跡は流路の北側に残された袋状の湿地によってうかがうことができる。狩野川に架かる橋は現在でも三島市への新城橋一本のみであり、北側との交通は容易ではない(二万五千分の一地形図「葦山」参照、図1)。その地形を『静岡県駿東郡誌』の記述によってうかがっておこう。⁽⁵⁾

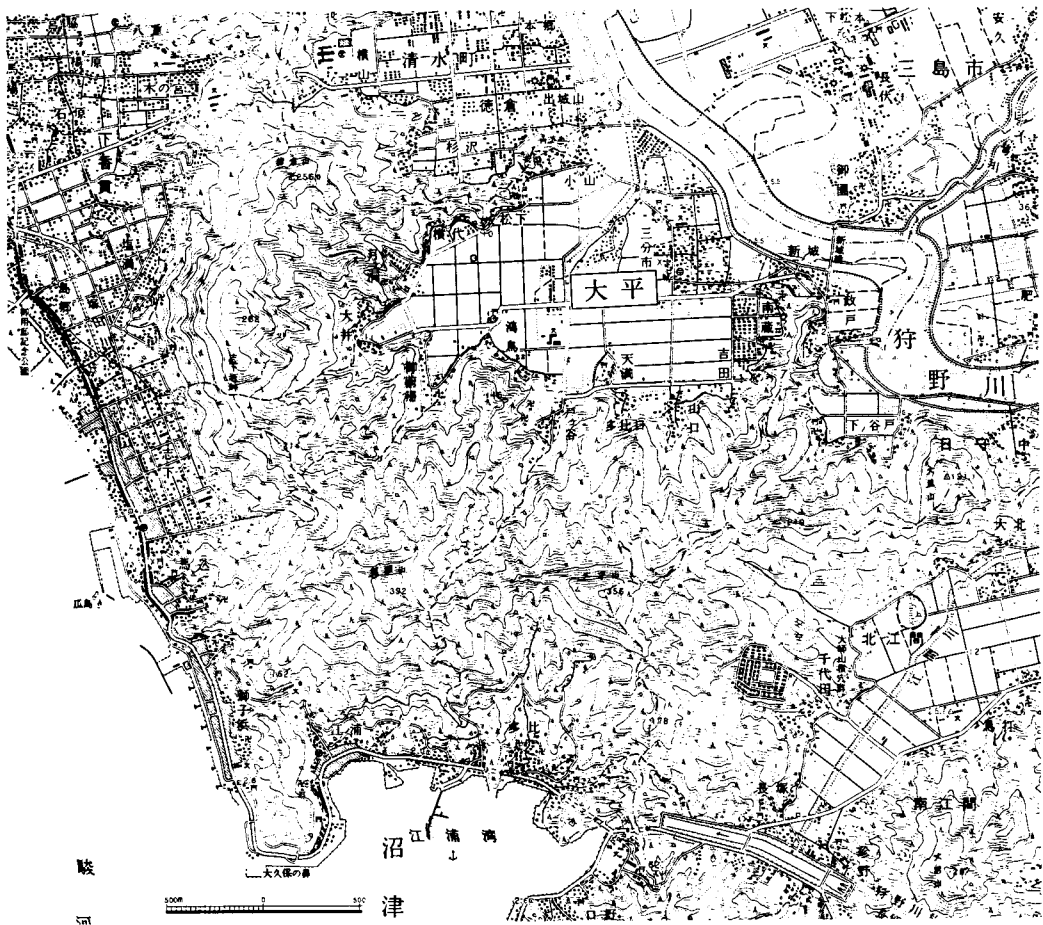


図1 大平の位置(2万5千分の1地形図「荊山」に加筆縮小)

本村は東南より西北に延びて山脈周囲す、山勢皆峻険成り、西北は稍低し、山は裾野なく脚下直に平地となる、東北狩野川を挟みて田方平野に連る、耕地は狩野川一帯の沖積層にて肥沃なり

このように、大平は三方を山で囲まれ北側を川で遮られた一つの独立した地域となっている。他の地域との交通も狩野川に沿ったかたちで東西に走る道と東部の新城で狩野川を渡る橋のみである。これが大平を近世以来一つの地域として存続させてきた大きな理由であろう。

(二) 集落と村落

大平が広大なのは山があるからではない。たしかに山も広く、領域の三方は山に囲まれ、その面積も大きい。しかし、その山の部分を除いても、広大なのである。現在では住宅地ができて、その領域を一望することが困難になりつつあるが、北側の狩野川の堤から南方を見ると、一面に水田が広がり、その水田の先の山裾に家々が列状に並んでいるのが見える。その家々は豆粒ほどの大きさである。大平は文字通り大きくて平な土地という意味であろう。集落は大きく二つの種類に分れる。一つは山麓部に分布するもので規模の大小はあるが、その数は一四程数えられる。小山、松下、横代、大井、御前帰、鴻鳥(小踊)、戸ヶ谷、天満、



写真1 新しい住宅が目立つ大平

大平は一つの村落として機能しているとは判断できない。現在は大平として一つの自治会を組織していないし、全体が生活基盤を共同で維持したり、また財産を共有していることはない。しかし、まったく意味が無い、単なる大字という土地表記のみではない。先ず、大平として一つの氏神を祀っている。神社は鷲頭神社である。大平の領域の南部、戸ヶ谷と多比口の間の山の尾根が平野に向かって突出した地点の尾根の上に鎮座している。そこは大平全体が展望できる所であり、また大平の各所から見ることができる所である。また、農業水利も大平全体が一つの体系を作っており、生産の条件の維持存続に大平という単位は意味をもってきた。そして、現在では自治会連

多比口、山口、吉田、南蔵、新城、政戸である。それに対して他の姿を示す集落が一つある。それは三分市と呼ばれる大きな集落で、大平の領域内の中央部に位置している。水田地帯のなかに島状に存在するものである。狩野川の蛇行が遠い昔に作り出した微高地と判断できる。この三分市は大平の中心地といってよい。小学校、市役所出張所、農協支所、郵便局、診療所等の公共機関がすべて三分市に置かれている。

合が大平として組織されており、地区全体の共通の問題について協議し、処理をしている。

しかし、この自治会が大平として一つになっておらず、あくまでも「大平地区連合自治会」となっており、その会則の第三条で「この会は各区の自治活動につき相互の連絡協調を図り、一致団結し地区民の福祉増進と、地区の発展向上をはかることを目的とする」とあるように、統合された組織ではなく、各区の連合組織であることが、大平にはいくつもの村落があることを教えてくれる。集落の数は、その地名の付いているものを数えても一五になるが、もちろんこの一五の集落がそれぞれ村落として機能しているわけではない。なかにはわずかな戸数のものもあり、実際には隣接の集落が組となって一つの村落となっている。あるいは大きな集落に小さい集落が含まれて一つの村落となっている。それぞれを村落と認定することは、大平の場合は基本的には以下の諸点を指標



写真2 政戸の山の神

にすることである。

- ① 独自に自分たちの氏神を祭っている。
- ② 境内に祈禱札を立てるツジギリをしている。
- ③ 道祖神を祭っている。
- ④ 山の神の祭祀を行なっている。
- ⑤ 公民館その他の集会施設を持っている。
- ⑥ 運営のための組織をもっている。

これらの指標によって判断すると、大きな集落はいずれも単独で一つの村落となっている。例えば、小山、大井、戸ヶ谷、政戸がそれに該当する。また、御前帰は隣の鴻鳥を、山口はやはり隣の吉田を含んでいる。それに対して、小さな集落の松下と横代は二つの集落が一つの村落となっている。同様なのは天満と多比口、新城と南蔵である。逆に、大きな集落の三分市は東西に分れている。三分市は集落として見たときには家々が連続しており、一つの集落であるが、それを上記の指標に照して判断すれば東西二つの三分市に分れていることが判明する。

(三) 農業集落と村落

このような村落のあり方を、農林水産省の一九八〇年世界農林業センサス農業集落調査は、一〇の農業集落として把握した。すなわち、小山、横松（横代と松下）、大井、御小（御前帰と小踊）、戸ヶ谷、山口、新南（新城と南蔵）、政戸、東三分市、西三分市である。この農業センサスの農業集落の認定は、大平の実体をほぼ間違い無く示しているといつてよ

表1 大平の戸数と農家数

| 農業集落名 | 総戸数 | 農家数 | 専業農家 | 第1種兼業 | 第2種兼業 | 非農家 |
|----------|-----|-----|------|-------|-------|-----|
| 小山 | 57 | 29 | 1 | 1 | 27 | 28 |
| 横松 | 35 | 17 | 0 | 5 | 12 | 18 |
| 大井 | 25 | 22 | 0 | 3 | 19 | 3 |
| 御小 | 42 | 23 | 3 | 5 | 15 | 19 |
| 戸ヶ谷 | 35 | 12 | 2 | 2 | 8 | 23 |
| 山口 | 86 | 26 | 1 | 7 | 18 | 60 |
| 新南 | 36 | 16 | 2 | 2 | 12 | 20 |
| 政戸 | 25 | 14 | 3 | 3 | 8 | 11 |
| 東三分市 | 63 | 32 | 5 | 2 | 25 | 31 |
| 西三分市 | 121 | 24 | 0 | 2 | 22 | 97 |
| 大平全体 | 525 | 215 | 17 | 32 | 166 | 310 |
| 同上構成比(%) | 100 | 41 | 3 | 6 | 32 | 59 |

出典；1980年農業集落カード

いであろう。なお、その農業集落調査の結果による戸数その他の概況を示す数字を掲げれば右のとおりである(表1)。大平全体の農家数は二一五戸で、各集落の戸数計五二五戸の四一パーセントに過ぎない(なお、この総戸数は別に住宅団地を形成している戸数を含んでいない)。しかも、そのうち専業農家はわずかに一七戸、第一種兼業農家も三二戸であり、圧倒的に第二種兼業農家で構成されている。これも都市近郊農村として兼業化が進むとともに、住宅地化の波が大きく押し寄せてきていることが数字にも表れている。

四 自治会と村落

現在の自治会組織は、大平連

合自治会が全体の組織であるが、

それは各区の連合である。中心

は古くからの村落を基礎にした

七つの区で、それに新興の住宅

地の自治会を加えて全部で一

の区の組織で構成されている。

区と村落、集落の対応関係を表

にすれば表2のようになる。こ

れで明らかのように、旧来の村

落を継承した区は第一区から第七区まで、第八区以降の四区は新しく

住宅団地の開発に伴って形成されてきたものである。このなかで最も早

く形成されたのが市営大平団地であり、次いで東部の南蔵から吉田にか

けての水田を埋立てて造られた池田団地である。したがって、第八区以

下は地域としての並び順ではなく、開発年代順である。

(四) 近世地誌のなかの大平村

最後に近世の地誌に記述された大平村を紹介して、以下の報告の参考にしよう。近世の地誌に大平村が出てくることは少ない。駿河については何種類もの地誌が近世後期に編さんされているが、いずれも村名と石

表2 大平の区と集落

| 区 | 集落 |
|------|--------------|
| 第一区 | 小山 |
| 第二区 | 松下・横代・大井 |
| 第三区 | 戸ヶ谷・御前・鴻鳥 |
| 第四区 | 天満・多比口・山口・吉田 |
| 第五区 | 新城・南蔵・政戸 |
| 第六区 | 東三分市 |
| 第七区 | 西三分市 |
| 第八区 | 市営団地 |
| 第九区 | 池田団地 |
| 第一〇区 | ニュータウン |
| 第一区 | くつがた団地 |

高程度の記載である。そのなかにあつて、唯一詳細に大平村のことを記しているのが『駿河記』である。⁽⁶⁾大平村の具体像を描いており、貴重な文献である。その全文は次のようなものであつた。⁽⁷⁾

【大平】寛永改高千三百八拾七石七斗九升四合 外高六石 桃源院領 至沼津一里二十

町 戸倉の南十七町許 田額千七百六石七斗九升四合五勺 此賦 七拾貳石五斗

四升四合五勺 大河内善兵衛知行所 五百八拾石七斗 外二石七斗四升四合小物

成 稲葉紀伊守知行所 (云主水) 五百八拾石七斗八升七合 外二石一斗四升

五合 牧野若狭守知行所 貳百石 外七斗三升六合 諏訪左京知行所 (或主水)

貳百六拾九石七斗六升九合 外九升三合 安藤監物知行所 (或圖書)

○驚頭明神社 在驚頭山上 除地壹石三斗八升六合 神主 磯右近

祭神高靈神也 貴船に同じ、水徳神にて祈雨止雨の神なり。

神代紀曰。伊弉諾尊拔劍斬軻遇突智為三段。其一段雷神。一段

大山祇命。一段是為高靈。是即此に祭る所の驚頭明神也。祭礼

毎歲正月十八日

伝云。文明元年己丑春伊予国より勸請なり。本地薬師阿弥陀観音

仏也。

○御嶽山社 小山手白山の西、古社なり。 ○八幡宮社 三上野中の社にあり。

○住吉社 除地壹石六斗七合 ○山王社 ○浅間社 ○白髭社

○熊野社 白山社

以上八社神と云古来よりの鎮座なり。

○天神社 在天満 除地四斗五升八合 ○天神社 在吉田

○諏訪社 在正戸 小踊山田中にあり。

○八幡・第六天社 児御前と云、二座除地 在御前

○七面社 円行寺 在。 ○富士浅間社 新社の古城守護神。



写真3 大平村絵図（沼津市大平桃源院蔵）

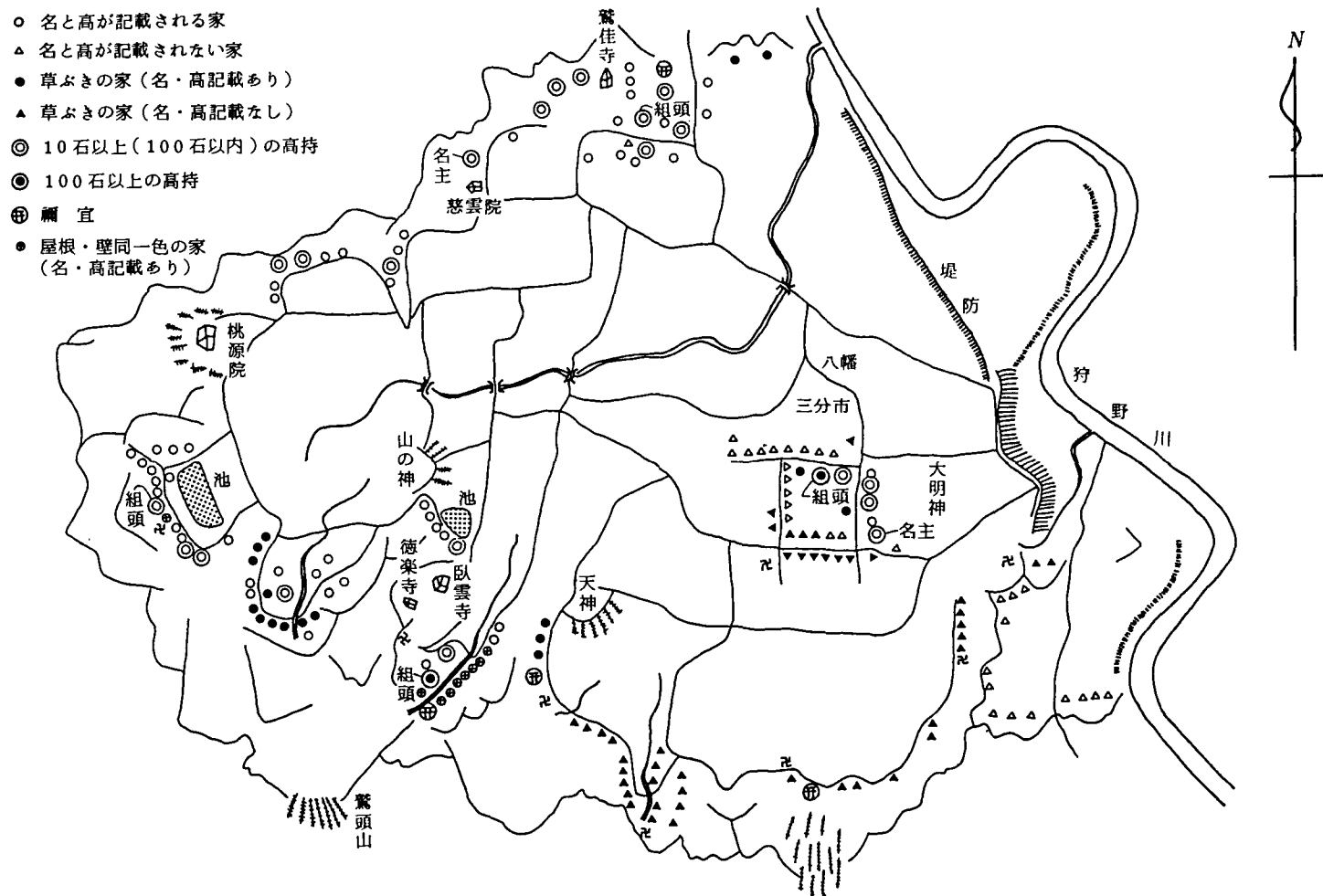


図2 大平村絵図による家の配置（篠原徹・塚本学 作成）



写真4 大平村絵図(部分)小山



写真5 大平村絵図(部分)三分市

○金毘羅社

○大平山桃源院 洞家 安倍郡鋪地徳願寺末 御朱印寺領六石 開山興國

玄辰和尚 永正元年甲子八月九日寂

開基桃源院殿慈雲妙愛大姉 寺僧伝云。今川義元朝臣伯母と。
藤泰 按に 大姉の法号本寺得願寺にては得願寺殿慈雲妙愛と印し

て開基とす。いづれの寺伝も亡て義元朝臣の伯母とのみいへり。此
説非か。必今川義忠朝臣の室北川殿なるべし。北川殿は小田原の北
条長氏の姉なれば、此地にも菩提寺を建立して、小田原よりも仏事
を修せられしならむ。
但此寺建立の頃は長氏は
是山に在住の時か。

○徳願寺に慈雲心月日供として太平郷善兵衛名二十一貫文寄進領掌の今川義元文
書あり。これ義忠の妾北川殿の法諱なり。義元の祖母にして伯母にあらず。又長
氏の妹にして姉にあらず。

薬師堂在門外

○龍頭山慈雲院 同宗 同末 除地老石四斗六升 開山一山州和尚 寛

文六年

開基慈雲院侶伯道徹居士 寛永十七年歿 俗称未詳

○石雲山龍音寺 同宗 桃源院末 除地老石八斗六合 ○庚申堂 吉田

○東向山臥雲寺 済家 盧原郡清見寺末 除地武石八斗三升六合 開山玉

翁西堂和尚 暦応二年乙卯八月廿日寂

○驚頭山徳楽寺 同宗 同末 観音堂後にあり 除地武石七斗六升式合

開山東谷和尚 文禄三年甲午正月十五日寂

○驚頭山驚桂寺 同宗 同末 除地老石五斗老升式合 開山本堂和尚

○妙向山円行寺 日蓮宗 豆州玉沢末 在新莊 除地老石三升 開基惠光

院日這 貞享元年甲子寂

○阿弥陀堂 山口 ○不動堂 ○庚申堂

○実正院 当山派 天満

○大平新城墟 又新莊共いふ。大平日守の界正戸に
あり。妙向山円行寺の南の山なり。

文亀二年の頃より小城を築、富士浅間を祭る故に富南城と号すと
云。小田原北条家の臣遠山民部守衛たり。天正の頃北条右衛門佐氏
堯居る。また北条左衛門大夫氏忠とも云。氏康の五男後大関斎と号
豆州沢田林際寺に葬。大嶺宗香大居士。又武州玉縄の城主氏勝とも
あり。

○驚頭山 大平村の南山高二十町。西は江の浦・獅子浜・志下村

なり。林樹蒼鬱として深山の如く、幽谷高峻にして石巖峙つ。中
將岩と云ひ驚頭明神座す。

女驚頭山東に連る峰をいふなり。
山口山又
多比口山

○大平塘 二

○小地名 山口 天満 新社 吉田 大井 正戸 小山 三上

御前婦 小踊山

なお、このような大平村の様相を図像的に教えてくれる資料が元禄五
年（一六九二）作成の「駿州駿河郡大平村絵図」（桃源院所蔵）である。
そこには河川、道路、田畑、そして百姓の家屋敷、寺院、神社、祠等が
記されている。家については写実的に屋根が描かれ、草葺きかどうかも
判定できる程である。但し、それが実際の通りかどうかはもちろん明ら
かでない。家には名前、村役、石高等が記されており、情報は豊富であ

る。描かれた百姓の家屋敷は全部で一八〇軒程であるから、これが大平村の全百姓を記入したものではないことが判明する。当時すでに三〇〇軒近い家があったと考えられるからである。⁽⁸⁾ここに描かれた大平村は現在の二万五千分の一の地形図に対応しており、当時すでに現在の村落の基本は完成していたことが分る。以下の『大平年代記』の記述と対応させることで、大平村の具体像はより豊かになるであろう。⁽⁹⁾

二 『大平年代記』の世界

(一) ムラの歴史と『大平年代記』

かつて狩野川が蛇行して形成した低平な土地を水田として開発して、山裾に屋敷を求め、あるいは微高地に集落を形成し、人間の居住空間にしてきた。その開発がいつごろ行なわれたのかは明らかではない。蛇行する狩野川の作り出した低湿地は必ずしも容易に人間の生活空間にはならなかったことは推測に難くない。しかし、他方で山の麓は微高地となっており、前面の低湿地あるいは狩野川の流れを容易に利用することができる土地として比較的早くから人々が住み着き、水際を水田化してきたものと思われる。そのような限られた部分のみが生活空間となっていた大平が、全面的に開発されて、近年までの景観につながる様相を形成したのは中世末から近世成立期にかけてのことと推測される。そのような大平の村落形成過程を記述した珍しい史料に『大平年代記』がある。⁽¹⁰⁾

『大平年代記』は成立年代、著者とも明らかでないが、大平の開発形

成の過程から始まり近世における村を巡る事件等を記しており、大平という一つの地域の村落生活の歴史を具体的に教えてくれる貴重な史料である。大平には現在何種類もの写本が残されているが、記述内容からすると、それらが安永年間の記事を最後にしていることから判断して、恐らく一八世紀の終りころの成立と考えられる。⁽¹¹⁾しかし、記述の表現において享保前と後で異なることが指摘されている。また明和五年(一七六八)に執筆された『大平道之記』が既に文中に於いて『大平年代記』について述べていることも注目される。⁽¹²⁾さらに片岡家本の『大平年代記』の表紙には「四冊之内」として古い順に番号が付けられているが、四冊目は慶安五年(一六五二)までであり、改元後の承応元年からは「四冊之外」として番号が振られている。これらのことから、最初の成立は一七世紀後半から一八世紀前半であり、それが写され書き加えられて第二次的に成立したのが安永年間と考えられる。⁽¹³⁾そして、その写本の一本には末尾に「安永九庚子年より文政十亥年迄四十八年之間二代程相統人茂未熟故、委細分り兼候許ニ而色々相尋是る次者印置候」と記されているので、さらにその後も書き継がれようとしたようであるが、実際にはその記事は残っていない。これが一九八一年に活字となって公刊された結果、多くの人々が読み、内容の豊かなことに驚かされた。今回ここで利用するのもその「沼津資料集成」本である。

『大平年代記』は中世に遡って村落成立の歴史を記すが、成立年代から判断して、その記述内容に十分に信憑性があるとは言えない。記述内容においていかにも近世的な感覚や知識で表記しているところもある。

また、大平全体を等しく描いておらず、特定の家の立場から記述されている傾向がある。したがって、ここに記されたことをそのまま歴史的事実とすることはできないであろう。むしろ、近世中期に大平に暮らしていた人の自分たちの村について歴史認識を示す記述として読むべきであろう。伝承としての歴史を文字化したものと考えるべきものである⁽¹⁵⁾。その点では民俗史料というべき文字資料である。

(二) 大平への来住と開発

『大平年代記』は、大平の開発について元弘元年（一三三一）のこととして次のような記事を掲げている⁽¹⁶⁾。

一、元弘元年未ノ年、越前朝倉之浪人星屋修理之亮、杉ヶ沢ニ遂居ヲ、山越ニ此所を見分、幅二拾丁計ニ、長サ一里程之平地。然共中ニ壱ツ之入江、広サ拾間計、長サ十丁計ニ而東西之通路無之。廻り者皆蒲池也。江之東ハ一面ニ河原ニ而、芝原土地者川と同様ニ而小砂也。山越ニ于朝于夕芝切沼越を初而開発して、

一、正慶元年壬申ノ春、主従四人ニ而、日々夜々ニ切開。同二年酉迄。このように、大平の開発を星屋修理之亮という人物であるとしている。星屋という家は星谷とも書き、近世を通して大平の有力な百姓として存在したし、村役人を歴代務めてきた。中世文書を所有しており、中世以来の系譜を引く家であることは間違いない。近世成立期の未だ兵農未分離のなかで武士としてのコースを歩みつつあったし、また幕藩権力とも

関係をもっていた⁽¹⁸⁾。

そのような家が大平の開発者として登場してくることに注目しなければならない。星屋は越前朝倉の浪人だといひ、最初は山を越えた杉ヶ沢という所（駿東郡清水町徳倉の南部の杉沢のことと思われる）に住んでいたが、広い低湿地があることを発見して、主従で開発に取掛かったという。ここで記されている大平の景観は狩野川が蛇行した結果あちこちに中洲を作っていた様相をよく示している。現在の水田地帯に大きく湾曲して狩野川の蛇行跡が入り込んでいて、山裾以外には直線状に東西に移動することは不可能だったことを語っている。年代的には一四世紀前半とすることはできないが、少なくとも大平の低地が開発されて水田になる前の様相を示していると言つてよいであろう。なお、大平の地がそれまでは無人の土地だったというのではないであろう。『大平年代記』は鎌倉幕府成立の時期に対応させて、ここに関所が設けられ、また富南城がつくられたことを記している。もちろんそれは史実というわけではない。大平の歴史を中央の政治権力に結び付けようとしていた記述と言ふべきであろう。

星屋主従はある程度開発が進んだところで、大平に家を構えたといひ『大平年代記』には記されている。そして、他の人々も大平に来て開発を進めた。その大平が次第に人家が出来、集落が形成されていく過程を、『大平年代記』の記述を追って見ていこう。

先ず星屋氏に次いで大平に居住したのは片岡氏であったといひ。『大平年代記』は建武元年（一三三四）に次のような記事を掲げている⁽¹⁹⁾。

一、建武元年申戌ノ八月、上野国乗付之住人片岡権之輔当境ニ知因之

者徘徊之由、伝聞尋求来り而、此山陰ニ蜜ニ庵を結ヒ、暫ク時越

経而、時しも秋之最中之鮎之沢山ニ下リ候節、卒ニ河網を仕立、

朝夕魚越取而世之経営とす。此時ニ星屋修理之亮開発地、田地五

反三百坪、畠地一千八百坪、此敷地越構へ、仮家を致、引移る。

星屋氏に続いて片岡氏が来たのであるが、彼は最初は農民としてでは

なく、狩野川で漁をする非農業民として生活を始めた。大平村の旧家と

言われる家の来歴を説くのに漂泊してきて川漁をする人として描かれて

いることは注目すべき点であろう。この片岡氏も翌年の春から田畑の開

発を始めた。そのことについて『大平年代記』は次のように記述している。⁽²⁰⁾

此春畠権之輔茂新地開発之願を立、芝伐沼起耆人ニ而ハ難相成、人
足越入而日々夜々ニ開キ而

一、延元丙子年ノ同二年丁丑春ニ至而田地四町三反二百坪、畠地十三

町三百坪也。然ル処ニ、八月三日ニ大水ニ而、新地田畠悉く指埋メ、

然共土地者高く相成、地面ハ弥々宜敷も相見ヘ候へとも、何と申茂

田畠ニ難成、相捨置候。

星屋氏のように主従関係にある者たちが開発したり、あるいは片岡氏
のように人足を雇用して開発したりして、次第に大平の耕地は拡大して
いったという。しかし、それが集落の形成をもたらしただかどうかは明ら
かでない。星屋氏と片岡氏を中心に開発が進むとともに、その開発した
田畑を給与して百姓たちを住まわせることが行なわれたものと推測され
る。応安三年の記事として次のような集落形成をうかがわせる文章が出

てくる。⁽²¹⁾

畠の中に手々ニ小屋を掛、出作場と定メ、出水之節ニハ根付ヘ引退居
而出作す。是越向原と名く。小屋十三軒。

この一三軒の小屋を低湿地のなかの島状になった微高地に設けた百姓
たちとは如何なる存在であり、小屋を設定する前は何処に住んで開発の
為に通つてきていたのかは明らかでない。星屋、片岡氏といかなる関係
にあったかもはっきりしない。しかし、出作り小屋に始まった向原が次
第に居住空間として形成されてきたことが知られる。そして、応安五年
には向原に家二三軒、小家九軒、人数二七〇人となり、これを向原二拾
三竈と言ったという。⁽²²⁾

(三) 集落の形成と村落

このようにして次第に人家ができ、集落が形成されてきたのであるが、
それを支配者側が把握したのは至徳元年(一三八四)のことだったとし
て、『大平年代記』は次のような記事を掲げている。⁽²³⁾

一、至徳元甲子年、駿府領ニ相定リ、御奉行御見分之上同二年乙丑年、
開発人御奉行所ヘ被召寄御申渡候。則御墨付被下置候。是ノ永々今
川領と相極リ候。

新地指置之事

一、開発之内三分一越指置候。残之分者其方ヘ預置候。尚開発不
可有怠慢候。以上。

至徳二年丑ノ二月二日

国民

開発人 権之輔殿

この書付の文面に三分の一とあることから、村落名としての三分市が生れたという。向原が三分市となったのである。そして、嘉慶元年（一三八七）に田畑の改めがあつて、支配機構も整えられた。それが次の記事である。⁽²⁴⁾

一、嘉慶元丁卯年、田畠改メ書上、此年ノ支配人ニ世話人二人ツツ被付候。田畠四拾五町、内三分一を指引。

残三拾町

開発人 権之輔
世話人 九郎治
同 半兵衛
右是越東組ト云

百姓株数大小
二十九軒
三拾六町四反
開発人 修理之亮
世話人 重郎右衛門
同 久右衛門
是を西組と言

百姓株数大小
二十九軒
建仁二年ノ城付之郷士、地下人茂此度相談し、平ノ百姓と相成り、是越平之百姓と言。是茂改メ。

古地四町五反三百坪

新地拾壹町四反六拾坪

新古共

拾六町

開発人 支配
左 門
世話人 新三郎
同 丹治

右是越平組ト言、百姓株数大小

二拾軒
三組合八拾二町四反 三組百姓
七拾八軒

町反坪田畑仕訳帳ハ外ニ有

田大中小 三通り

畠圃畑 三通り

右、佃取之御定法を以、貢物を指納、是を佃御正作と言。大物成り、小物成り三毛之貢物算用帳者、外ニ有之。

大物、小物

貢メ永百拾五貫貳百五拾文

嘉慶元丁卯ノ十一月

ここに集落としての景観とそれを基礎にした社会組織としての村落が明確になったといえよう。大平の支配制度としての村は広く、大きいために、三組に分れて把握されることとなった。その後、応永一八年（一

四一(一)には、百姓株数八九軒、地借り水呑四〇軒だったと出てくる。⁽²⁵⁾

この百姓の区分が応永年間のもでないことは明らかである。近世的な用語を使用しているものであり、そのまま実体と考えることはできない。

その後の大平の地への来住者は、甲斐の武田氏の滅亡に伴うものとして記載される。次のような落武者の話である。⁽²⁶⁾

同(元亀)十一年末ノ年、甲府ノ御家中隣国他国江引退キ、又ハ親類縁者ヲ頼ミ最に忍ひ、彼所ニ住居、大概者歴々茂多者民家ニ被下、皆浪人之跡と被相成候。世に甲州騒動とハ是なり。其頃、桃源院七代之住僧原氏宗古と戦場へ聞へし名高き仁なり。元来甲州出生ニ而原加賀守殿弟也。一家成るがゆへ。原氏一統四人、桃源院江引取、暫く休足被致候而先々案堵被成候。⁽²⁷⁾

同十二年申ノ年、寺中江飯屋ヲひつらひ、門前百姓之跡ニ住居ヲ定め、暫月日を被送候。扱て時移り世も変し、誠に光陰矢の如し、水の流と人の末者不知と世之諺にも言し如く、此仲秋ハ不思所之月見かなと皆打寄而、此所月の指入風輕世に稀也と案しミ、明石、晒葉ニも正る心地として余りニ月のさし入能故に、此処を月か洞と名付たりと申せしなり。

この原姓の四人はその後田畑を買入れて百姓となるのであるが、その間の事情を『大平年代記』は次のように記している。⁽²⁷⁾

同十八年(元亀)寅ノ春(中略)此節ニ者乱世後田畠荒地と成り、当村之困窮田地ホ売払度候へ共、何程ニも相手無之、難儀之折柄、甲州浪人衆田畠少々買求メ候様を聞出し候而、此上茂田畑相求め候様ニ御

座候哉、内意ヲ以承候得者、貯金有之由寄々申談進メ申候而田畠買初メ、是ハ金子沢山之様子相知レ、田畠七八十買求。此時ニハ名呼ハ不申候。只甲州四人衆と申せしとの異名付候と也。夫ハ三分一屋敷ヲ求而家作して住居致し候積り落着候

この前後には浪人がこの地に住み着いたことを『大平年代記』は何カ所かで記しているが、これを歴史的事実として理解することは必要ないであろう。先祖を他地方から来た落武者とか落人とすることは各地で伝えられていることであり、先祖の出自を武士に求めようとする一種の貴種信仰であろう。近世成立期には、このようにして現在の大平の農家の主要な姓の家が揃ったと『大平年代記』はしているのである。そのほぼ最後の来住は寛永一三年(一六三六)の綾部氏であった。次のような記事である。⁽²⁸⁾

同十三年丙子ノ年、何国々来り候哉、浪人老人来り候而、戸ヶ谷権右衛門方江落着、少々貯金茂有之様ニ相見申候、今川家浪人共申、又ハ甲州浪人共言、何ニ致し候而も歴々ニ而相見江人柄茂宜敷候故、権右衛門者不申及、其外村方慇懃ニ相成、遂当村ニ住宅茂致度申候而少々宛商ホヲ初、段々出精ニ而身上宜敷相成候様ニハ見へ候得共元来者貯金御座候由評議ニ候。夫ハ田畑を求メ、後ニ者権右衛門一家と相成り、綾部と名字を譲り、親類と成り歳々繁昌致し候。

綾部氏の来住の仕方はやはり近世的的と言えよう。商売をし、それから田畑を購入して百姓として大きくなっていった。ここでは氏素性は強調されることなく、定住がなされているのである。それまでの来住者につ

いての武士出身であることの強調とは大きな相違と言ってよいであろう。

四 狩野川との戦い

大平の開拓は水との戦いの連続であった。それを記録することが大きな目的だったと思われるほど『大平年代記』には水に苦しめられた記事が多い。堤防もなく乱流し蛇行する狩野川が作ってくれた平地であるが、それだけに少し雨が大量に降るとたちまち折角開いた田畑は水に浸かってしまう。星屋主従が水田開発に乗り出した当初から悩まされ続けた。

先に、延元二年（一三三七）の大水の記事は引用し紹介したが、それから三年後の暦応三年（一三四〇）以降も引続き洪水の被害が大きかったことを以下のように記している。⁽²⁹⁾

同（暦応）三年辰ノ年五月、満水ニ而土地を埋る事三尺、又ハ場所ニより七尺八尺計り。同四年ノ

一、康永元年壬午。同癸未。同三年甲申ノ年迄五ヶ年之内ハ数度之出水故、作ハ不実皆損ニ而田畠ニも成間敷様ニ被思、開発茂退屈致し是

六。
このように、連年のように洪水に襲われ、被害を被った。そこで、文和元年（一三五二）開発中心の考えを改め、先ず治水工事を行なって安定的な条件を作ってから耕地を開発することにしたと『大平年代記』は次のように記している。⁽³⁰⁾

一、文和元年壬辰、満水茂無之。寄々申合、是ノハ先杭を立、土手をなして水除を先とし、開発を後ニ可致と之評議之内今年ノ

一、延文元丙申、酉、戌、亥迄八ヶ年ハ満水も無之、開発を専一とす。同五年子年茂無之。

土手を築き、川の水が増えても浸入しないようにしてから耕地の開発を進めようとしたのである。それは一時は成功したように見えた。しかし、それから五年程後の貞治年間になると再び狩野川の脅威に晒されることとなった。すなわち、以下の文章である。⁽³¹⁾

一、貞治元壬寅、同二癸卯。同三甲辰。同四乙巳、同五丙午七月出水ニ而夏物、小物ホ皆無。同六年丁未ノ八月、満水ニ而入江を指埋メ、一面ニ海之ことく水之居河留事。十四五日、少々水減りて、江之尻越床割水進落、入江も埋りて沼地と成、堅り兼、漸く来年ニ至り而地面堅り候。

大水、満水の記事はこの後も多い。それを紹介するだけで多くの紙数を費やしなければならない。もともと狩野川の乱流が作り出した低地であるから、少しの雨でも耕地の方へ水があふれでる危険性の高い所であり、それは堤防が築かれた後年まで事情は変わらない点があった。⁽³²⁾ 現在狩野川の堤防上に明治四一年（一九〇八）建立の「洪水記念表」があるが、そこには「亥之満水」と呼ばれた寛政三年（一七九一）の洪水、「未之大水」と呼ばれた安政六年（一八五九）の洪水、そして明治二三年（一八九〇）、明治四〇年（一九〇七）の洪水の際のそれぞれの水位が刻みこまれている（写真参照）。

このように絶えず水の脅威にさらされながら、他方ではまた水不足に悩まされなければならなかった。低湿地を開発した中央部は湿地であり、

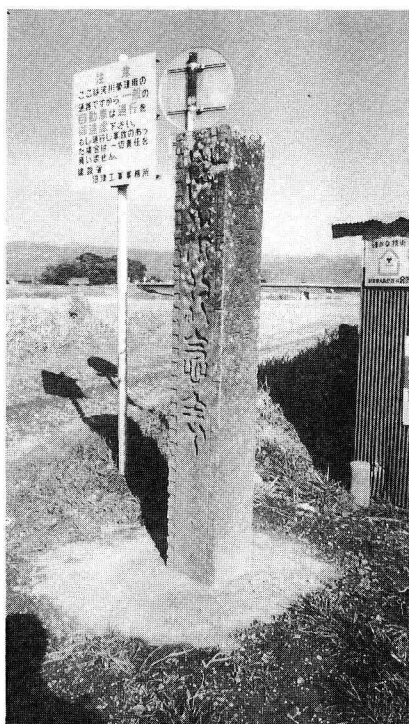


写真6 洪水記念表

なかには深くもぐってしまうような田の所も少なくなかった。ところが、山に近い少し高い場所には水が充分にはなかった。狩野川という大きな川が流れているが、逆に大平の低地を灌漑する小さな川がなかった。周囲の山から流れ出る水量はわずかであり、川というほどの流れを形成していなかった。そのため、水不足に悩まされる地域が出てきた。とくに日照りが続いた場合には水不足は深刻であった。これは開発可能な土地をほとんど開発しつくした近世になっていよいよ顕在化した。『大平年代記』はこのことについてやはり記事を掲げている。

その最初は、慶長十一年（一六〇六）の旱魃である。⁽³³⁾

同（慶長）十一年丙午年る三カ年、百参拾石ニ而参カ年切請ニ致し候。此時ニ而諸作皆無。此節扶喰願式百俵之拝借、百俵ハ五ケ年ニ返納之積り、残百俵者被下置候。

日照りが続くと、たちまちに水不足に悩まされた。同じ一年に旱魃と

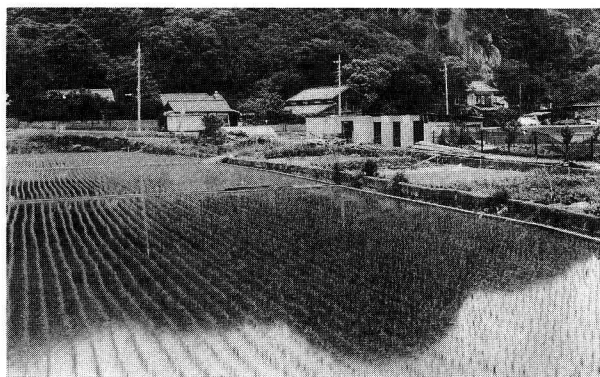


写真7 大井の溜池跡（手前が旧池、やや高い所が堤）

水害の両方が襲うことさえあった。慶長一六年（一六三九）の記事である。⁽³⁴⁾

同十六年辛亥年、旱損水損、依之検見之ヲ立、当年る年々検見有之、増方引方有之候。

旱魃の被害が恒常的におきるにいたった十七世紀後半にその対策として溜池の築造が考えられるようになった。延宝四年（一六七六）のことであった。その前年に大きな旱魃があつて、切実に迫られた結果であつた。⁽³⁵⁾

次のような経過が『大平年代記』に記録されている。

同（延宝）三年乙卯ノ夏、大旱魃ニ而田作草計ニ而稲作皆損ニ而此冬る大困窮ニ而扶喰願仕候。

同四年丙辰ノ春る溜井之願仕候而相叶御普請被仰付候。

同五年丁酉ノ春、西大井ニ溜井る壱ヶ所、東ニ山口ニ壱ヶ所被仰付。則御普請出来、溜井成就仕候。

同六年戊午春る溜井水筋を以水米西反別懸り出之を。此時ニ西反別帳、東反別帳と相別用申候。

同七年己未年る旱損水損無之、田作相応ニ実り申候。

しかし、このような恩恵もそれほど長くは続かなかったようである。

溜池の保水力が弱く、充分に水を確保出来ない状態が再び訪れたのである。元禄一六年（一七〇三）のことである。⁽³⁶⁾

同年（元禄十六年）春、山口溜井度々之破損故水持悪く、溜井ニ成兼候而永々堤無之同前ニ而、日損続候故村方名主、組頭相談之上、堤之願申上候処ニ下へ堤被仰付候。則御普請成就致候。此時ニ大井溜井御修覆被下置候。

(五) ムラの形成と神仏

以上のように、他所から順次来住して、狩野川の作った湿地を開発して耕地にし、山裾や微高地に住居を構えて、生活を安定させようと努力してきた。その努力は水との戦いであった。狩野川の氾濫によって田畑が水に浸かり、また逆に旱魃のために水不足となり、作柄が悪くなるという被害に対処し、それらの修復と回復に努力せねばならなかった。その努力は自分たちの力によって行なわれたものであるが、そのみでは不可能であった。そこに神仏の存在が大きくなる根拠があった。大平にも多くの神仏が勧請され、それぞれが村落形成とも重なって、地域の神仏としての地位を獲得していった。それは個別的であった。

最初に大平に祀られた神仏は、『大平年代記』の記載によると、御嶽権現である。次のように建武二年（一三三五）の記事に出てくる。⁽³⁷⁾

一、同（建武）二年乙亥春、修理之亮鎮守御嶽権現を祭。此時を吉例として毎年九月十二日ニ祭礼す。此里余リニ大キニ平カ也とて大平

之郷と号するなり。

この記事が教えてくれることは、神社は大平全体の氏神として勧請されたのではなく、星谷氏の鎮守として勧請されたことである。この御嶽権現は現在の小山の氏神である。したがって、開発百姓が勧請した神はその居住した村落の氏神として祀られることとなったのである。これは他の神社についても同様である。「英和元乙卯ノ八月、此所ニ八幡宮越鎮座せしめ、毎年八月十五日越祭礼日と定む」とあるのは、三分市の氏神の勧請を語る記述である。また嘉慶二年には「百姓之志願ニよりて、六月住吉明神を祭り而、六月晦日にはらい祓之祭を令行」とある。⁽³⁸⁾ 集落の形成と対応して、それぞれに鎮守・氏神が勧請され祀られるようになっていった。その数は康応元年（一三八九）には「平百姓鎮守四社之神共ニ一所ニ祭礼して、毎月三日ニ御神酒を以而祭礼」として、その結果大平の神社は八社になったとしている。それらの神社の名称は富士浅間宮、御嶽権現、正八幡宮、住吉明神、白髭明神、白山権現、山王権現、湯屋権現で、それを総称して関西八社といったという。⁽⁴⁰⁾ その後、天正一八年（一五九〇）にはは政戸でも鎮守を祀った。⁽⁴¹⁾

正戸浪人百姓衆鎮守ヲ造榮し而、是ヲ内八社神とス。

内八社神者

結大明神、諏訪大明神、木曾大明神、佐口神、八幡宮、稻荷大明神、金山大権現、子之神神宮也

これらは現在も政戸の氏神となっている結神社に祀られている。

また寛永三年（一六二六）には「天満の天神霊夢ニより御造宮、是乃

鎮守とし祭ル。是迄ハ只石計ニ而社ハなし⁽⁴²⁾と、天満の鎮守が造営されたことを記している。村落の鎮守が個別的に勧請された。したがって、大平として鎮守は当初存在しなかった。このことは最初から大平という地域が社会組織を伴って登場していたのではないことを教えてくれる。天正一四年(一五八六)に「御奉行所より田畑ニ株位付と言儀之諸帳面相渡候。此算用仕用帳仕立ル者嵯峨之将監と言仁仕ル由、是水帳之発り也」と検地が行なわれたことを『大平年代記』は記しているが、そこに「是より大平三ヶ郷之内の小郷茂八ヶ郷也。此時に十五ヶ郷と成る。其内名ヲ立、小路ノヲ立改ル」という記事があり、大平は一五の郷で構成されることになったとしているのは、個別村落の揃ったことを表現しているであろう。しかし、現実にはこの一五がそれぞれ村落として機能出来たわけではなかった。実際には一〇程の村落として形成された。それは今日の状況に示されている。

大平はたしかに地形的に一つのまとまりを持ち、山と川で遮られていることで小宇宙のような印象を与えるが、そのような地形が自動的に一つの社会を作るわけではない。そこに居住した人々にとって社会としての統合の必要性があり、それが日常的に観念される生活がなければならなかった。現在の大平全体の鎮守は驚頭神社であるが、これの勧請については『大平年代記』は文明元年(一四六九)以降の項で次のように述べている。⁽⁴⁴⁾

一、文明元己丑ノ春、伊予国方日損水損之守護神とて驚頭明神勧請、則観音之御堂と双而鎮座せしむ。神主も同国方付来ル。依之而伊予

守殿と言。

一、同二年庚寅年、観音堂を元之地江返ス。

(中略)

一、同十三年辛丑春、驚頭明神山之嶺ニ鎮座。年来祭り八社神と同様ニす。

大平に星谷氏が来住してからすでに一世紀半が経過している。その時点になってようやく後世の大平の鎮守は勧請されたのである。しかもそれは旱魃による日損と洪水による水損を防ぐためである。大平という土地がたえずこの両者に悩まされてきたことは紹介したとおりであるが、そのためにはるばる伊予国から神主共々勧請されてきたのである。とくに驚頭神社は雨をもたらしてくれる神として大平の人々の崇敬を集め、ついに大平全体の鎮守となった。最初は観音堂の所に祀られたが、後に驚頭山ということになる南側の山の上に社屋が建てられ、祀られた。

『駿河記』が「水徳神にて祈雨止雨の神なり」と記すように、大平の水との戦いのなかで勧請された神であり、それが大平全体を統合する鎮守となったことは大いに注目されよう。なお、この驚頭明神が現在の場所に鎮座して驚頭神社になるのは明治になってからである。現在の社地はもともと天神山と呼ばれている所であり、前に見た天満の天神が祀られていた場所である。明治七年(一八七四)に驚頭山の頂からここに遷座した。驚頭神社の祭祀は、各村落の連合によって行なわれている。現在の表現では、当番区と呼ばれ、各区が一年交替で祭祀を担当する。区はもちろん明治以降の制度であり、それ以前は各村落単位で当番を担当し

てきた。これは区制度になってからも実質的には変らなかった。そして、各村落には、ネギバン（禰宜番）と呼ばれる役職があり、それが祭祀の担当者になる。

三 村落空間と民俗

(一) 村落の自律性と領域

大平は多くの集落によって構成されていることは、最初に述べたとおりであるし、それが中世後期に次第に形成されてきたことは『大平年代記』の記述によって知ることができることを前節で見た。三方を山で囲まれ、一方は大きな川で遮られた一つの小宇宙ともいべき大平は、全体として一つの歴史を形成してきたが、しかし常に同じであったわけではない。集落を基礎にした個別の村落が、それぞれの開発の事情を背負いながら次第に発達してきたのであり、水利の共通性、より切実には狩野川の水の脅威に対する対抗の必要性から、大平としての連帯と共同を維持発展させてきたというものの、決して常に利害が一致していたわけではない。山をめぐる、水をめぐる対立し、訴訟におよんだことは『大平年代記』の記すところである。⁽⁴⁵⁾ 小さい規模の個別村落はそれなりに自分たちの存在を主張し、また自分たちの地域を自らの力で守ろうとしてきた。以下ではそれにかかわる民俗を見ていこう。

大平の各集落はそれぞれ景観としての纏まりを示している。家々が屋敷を互いに近接させて設定し、連続した姿を示し、他の集落との間には

田畑や山があって互いに分離しているのが一般的である。その集落はそれぞれ名前がある。したがって、それは単なる景観上の纏まりではない。社会性を帯びており村落として把握できるのである。もちろん、最初に述べたように、集落は単に景観上の纏まりがあるだけでは、村落として把握することは出来ない。村落として認定できるのは、その集落を基礎に一定の社会組織が形成され、自分たちの意思を何等かの方法で形成して、その個々の成員に対して一定の規制を加えつつ、その領域の生活および生産の条件の維持に努める存在でなければならない。それは逆に見れば、個々の成員の生活・生産の維持存続にとってその組織が必要不可欠な存在でなければならない。このような意味で大平の集落を考えてみると、必ずしも大平のすべての集落が村落として存在してきたとは言えないことを最初に指摘した。その村落把握の指標として氏神祭祀と並んでツジギリと道祖神の祭りを掲げておいた。この二つの民俗は、自らの社会を外から守ろうとするものであり、自分たちの世界をはっきりと示す行事を内容としてもっているものである。以下ではこの村落の領域に深く関係した二つの民俗について見ておきたい。

(二) ツジギリ

大平の各村落は、毎年七月の初旬にツジギリ（辻切り）を行なう。自分たちの村落の入口と考えられる地点に役職者が札を竹に挟んで立てる。いわゆる道切り行事である。立てる地点は一カ所ではなく、道路が集落に入ろうとする地点全てである。立てるのは魔除けのためだと地域の人

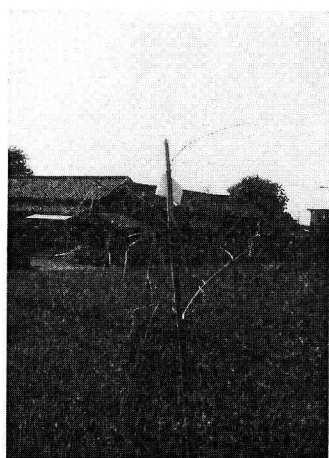


写真10 東三分市のツジギリ



写真9 西三分市のツジギリ

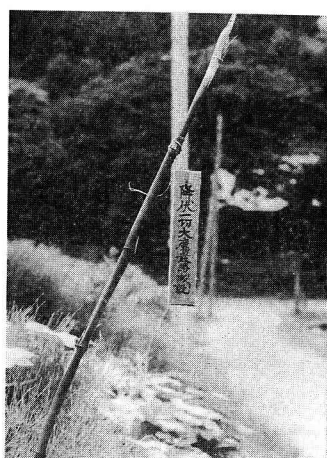


写真8 戸ヶ谷のツジギリ



写真12 新城のツジギリの札

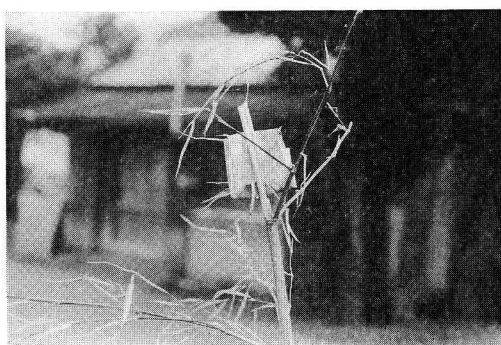


写真11 新城のツジギリ

々はいう。なお、札は立てたままにしておくのではなく、後日撤去する。西三分市では七月一七日にフダオサメをして、氏神の八幡神社の境内で燃してしまふ、東三分市では九月一五日の風祭りのときに集めて燃す。他の村落でもほぼ同じで、秋に入る頃には札はなくなっている。同様の行事は周辺の村落ではあまり顕著ではない。北隣の三島市内でも行なっている村落がないわけではないが、それほど多くはない。それが大平の各村落では現在もしっかりと、あるいは村落によっては近年まで行なっていたことは注目される点である。今日も毎年ツジギリをしているのは、御前帰、戸ヶ谷、天満・多比口、南蔵・新城、政戸、東三分市、西三分市の七村落である。他の村落でもかつては行なっていたが、今では廃絶してしまっている。大平のツジギリにはいくつかの特色がある⁽⁴⁶⁾。

この行事について注目すべき点の第一は、同じ大平であっても、村落によって立てる札の種類が異なることである。それは札の素材の相違ばかりではなく、札として勧請してくる神仏の相違まで含んだものである。素材では、多くは紙のお札であるが、戸ヶ谷のように木の札もあるし、また札をそのまま竹笹に挟む所もあれば、それを竹の皮に包んで立てる村落もある。そして、その札の中身もそれぞれ異なる神仏なのである。この一つを取り上げても、大平が全体として一つの村落なのではなく、個別のツジギリをする単位が独立した村落であることを表示し

ていると言えよう。その札の種類は以下のように多様である。

- ① 三島大社の札 東三分市、西三分市
- ② 円教寺の札 新城・南蔵
- ③ 禰宜番の檀那寺作成の札 御前帰
- ④ 適当な神仏の札 政戸
- ⑤ 当番作成の札 戸ヶ谷、天満・多比口

このように五種類の札がある。②の円教寺の札というのは新城所在の日蓮宗寺院で作ってもらったお札のことである。お札には「南無妙法蓮華經七面大明神擁護修」等と記されている。いわば地元の寺院が村落の祈禱行事に関係しているのである。それに対して、③の禰宜番の檀那寺作成のお札というのは、ツジギリに使用される札が一定しないことを意味する。禰宜番は、大平の各村落にある重要な役である。御前帰では、村内の家が毎年二軒ずつが交代で担当するものである。任期は一年で、その一年の間、御前帰の鎮守の祭りの世話、各種の信仰行事の執行を担当する。その禰宜番がツジギリをも担当して、札を準備して立てる。その年の禰宜番が自分の檀那寺へ依頼してお札の作成をしてもらうことになっている。④の適当なお札というのは、禰宜番や当番の判断で適当な神社や寺からお札を分けてもらって立てるもので、三島大社のお札やあるいは大平の鎮守鷺頭神社のお札であったりする。年によっては檀那寺の発行した札であることもある。⑤の当番作成の札は、たとえば戸ヶ谷の例で言えば、木の札である。大きさは幅五センチメートル、長さ二〇センチメートル程度であるが、必ずしも大きさは厳密ではなく、一

定しない。そこに当番が「降伏一切大魔最勝成就」などという祈禱文を墨で書く。

大平のツジギリについて注目すべき第二点は、札を立てる地点が非常に多いことであろう。札が立てられる場所は、大部分が、家々がとぎれる所であり、いわゆる村境と考えられる地点である。全国的に見て、道切り行事は村境と考えられる地点に立てられるが、その地点は村落に入ってくる主要な道路、いわゆる街道や往還に立てるのが普通である。したがって、村落の出入口と考えられる地点二、三カ所というのが通例である。それに対して、大平の各村落のツジギリは、集落内に入ってくるあらゆる道路について、集落の家々のとぎれる地点に札を立てる。例えば、東三分市は全部で一三カ所、西三分市は同じく一〇カ所、戸ヶ谷九カ所、政戸八カ所、新城六カ所というように、どの村落も実に多くの地点に札を立てていることが分る。東三分市や西三分市の札は、二本で一組であり、それが集落の周辺および隣の三分市との境に立てられるので、準備する札もまた笹竹も数多く必要とする。図にも示したように、人が通る道であれば全て集落内から田畑の方へ出る地点で、道の両側に笹竹にお札を挟んで立てている。このように、多くの地点において道切りをするのは何故であろうか。その理由を明らかにすることは困難であるが、恐らくは前節で見てきたような、長年にわたって自然の猛威にさらされ、多くの被害に遭ってきたことが、自分たちの村落を守ろうとする意識を強くした結果であると考えられよう。そして、この道切りを続けてきたことが各村落の自立性を強く示しているとも言えるであろう。

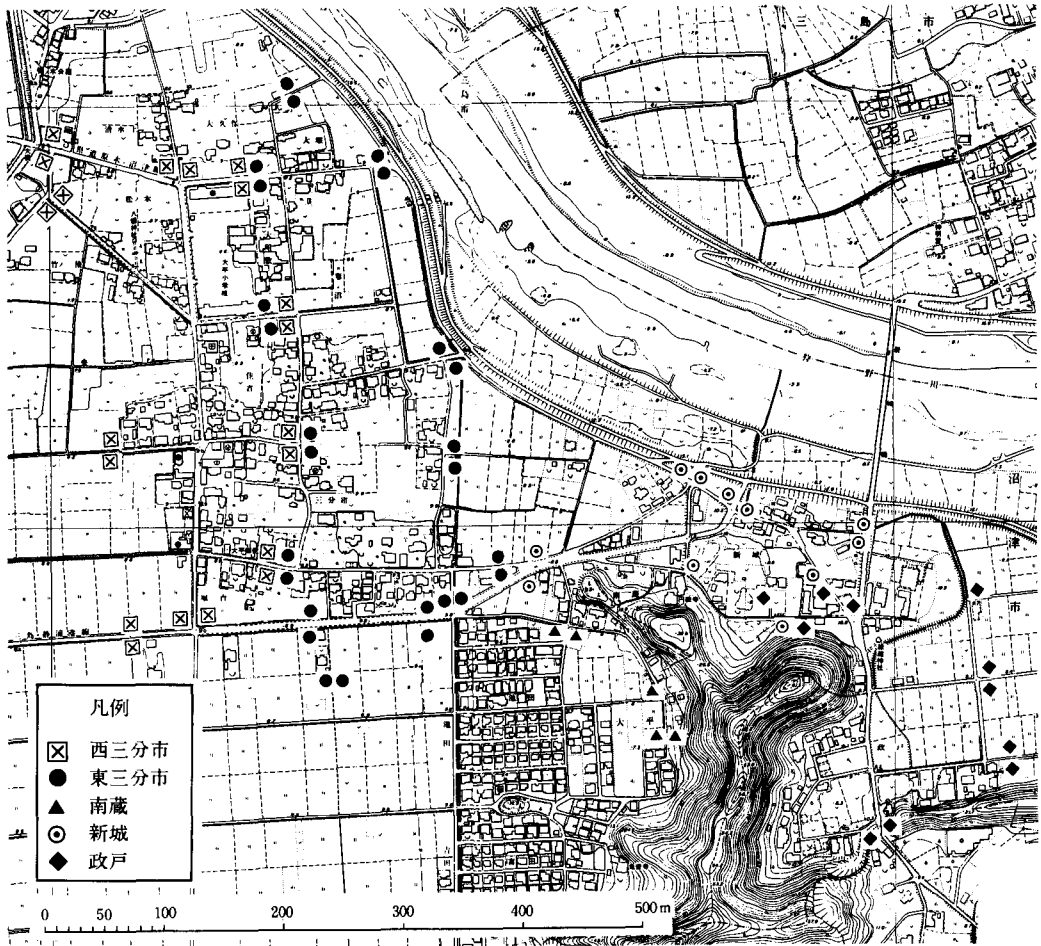


図3 三分市・新城・政戸のツジギリ地点 [地図は沼津市基本図(1980年作成)を縮小]

大平のツジギリの注目すべき第三点は、ツジギリの地点の可動性である。ツジギリは、すでに述べたように、道路が集落の外に出る地点に設定される。しかし、近年の家の増加は従来のツジギリの地点よりも外側に新しい家を増やしている。集落としての規模が大きくなってきているのである。新しい住宅が別に一つの団地を形成した場合には、完全にツジギリの対象ではないが、個別に住宅が建てられ、しかもそれが旧来の家と何等かの因縁をもっている場合には、その家々を村落の組織や行事から除外するわけにはいかない。新しい家々の側も村落の成員となつてつきあいをし、行事に参加することで安定する。新しい家がその一員として村落の保護下に入ることである。そのような保護下に入った家をツジギリの外に住んだ状態のままにしておくことは、生活を不安定な状態におくことを意味する。大平では、新しい家が従来のツジギリの地点よりも外側にできると、ツジギリの地点が移動して、新しい家を包み込む形でツジギリ地点を設定する。他の地方では、道切りの地点は固定しており、家の増減によって移動することは少ない。

しかも、大平ではツジギリの地点の移動が、異なる村落のツジギリと交錯するという現象をもたらしている。自分の村落に属する家が外側に向かって増加していった

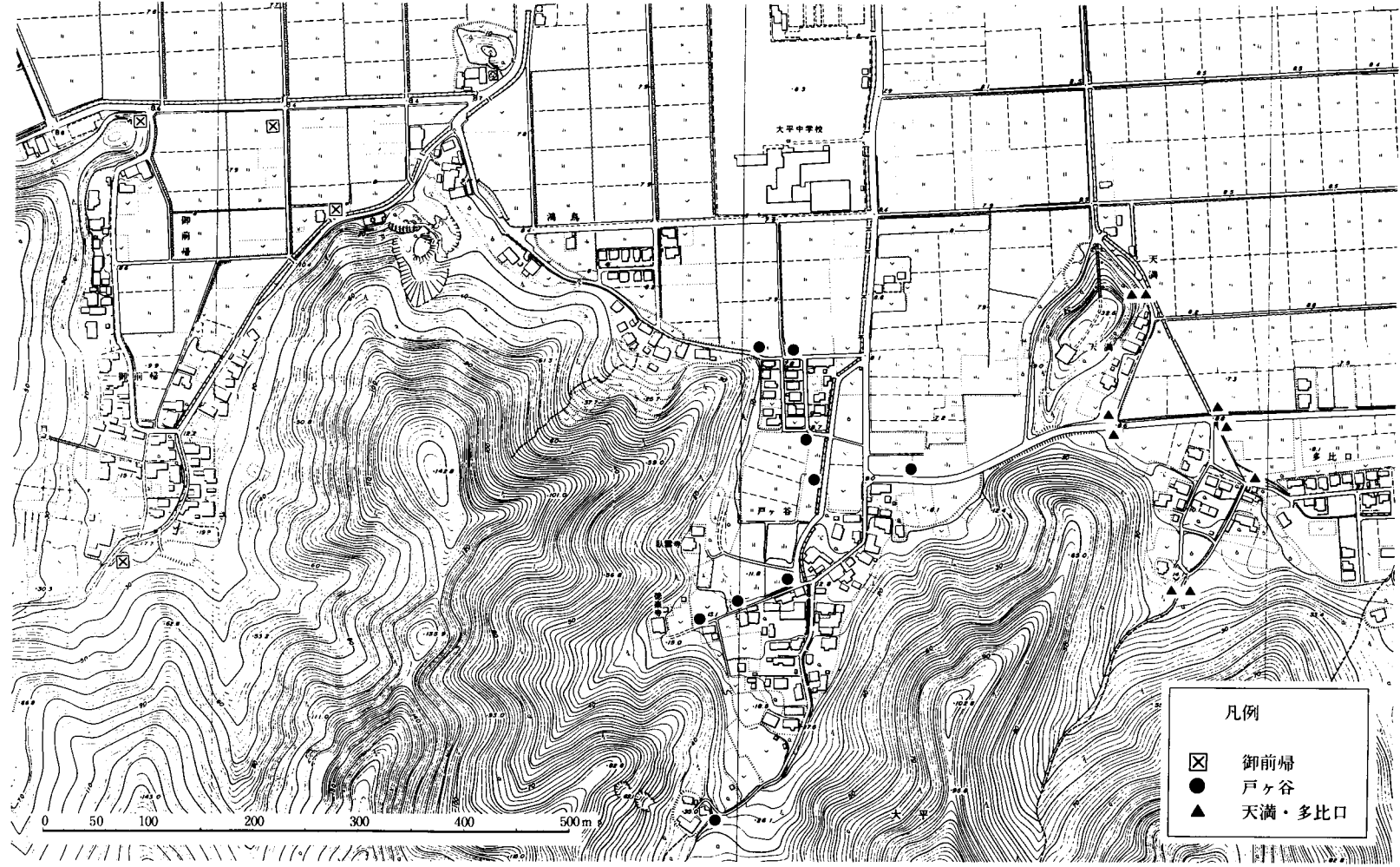


図4 御前帰、戸ヶ谷・天満、天満・多比口のツジギリ地点 [地図は沼津市基本図(1980年作成)を縮小]

場合、ツジギリ地点も順次外側へ移動する。この運動が隣接する村落の間でおこると、ツジギリの地点は接近し、ついには他村落のツジギリ地点を越えて札を立てるということになる。現在では、政戸と新城のあいだにこのような現象が見られる。これは集落としての領域は明確でも、耕地も含んだ村落の領域が明確でないため、村落に属する家が必ずしも領域的に決められずに、その他の関係とか因縁によって決まる場合があるからである。しかし、その場合でも飛び離れてできた家まで属させることはない。あくまでも、自分たちの集落に連続性のある家々のみである。

(三) セーノカミの祭り

大平の各村落には道祖神が祀られている。この地方の道祖神は石像で、姿は笏を持った丸彫り単体像である。⁽⁴⁷⁾それが安置され、祀られている場所は原則として集落の外れ、家々がとぎれる地点で、道路が交差するか、T字状の辻である。また、公民館とか公会堂の脇に安置されているものもある。道祖神は村境に祀られているというのが民俗学の概説書や辞典での説明であるが、大平の道祖神は辻であり、たしかに家のとぎれた地点であるが、村境という判断は必ずしも出来ない。集落の内部での家のとぎれた地点であったり、集落内の辻であったりする。また、それが古くからの位置とはいえないが、公民館やお堂の脇にある所もある。横代や大井、山口のがそれである。したがって、道祖神の前は普通の道路幅よりはいくぶんか広く、人々の集合が可能な広場となっている。そこが行事の行なわれる場所であることを示している。むしろそのような人々が

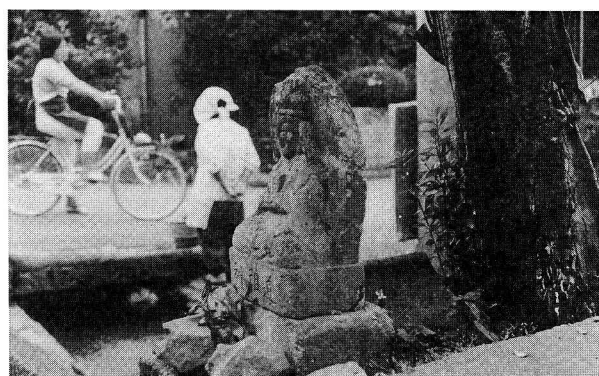


写真13 大井のセーノカミ

容易に集まれる場所に祀られていると言った方が適切な表現のように判断される。道祖神は村落で一つである。しかし、東三分市のように、二カ所に道祖神があり、東三分市を二つに分けた南町と東町がそれぞれ別々に祀っているものもある。これは三分市のように、村落が大きい場合に限られており、大平では道祖神は村落に一つが原則である。

道祖神という表現は大平では使用しない。大平の人々は、この地方の一般的な言い方であるセーノカミと言う。しかし、大井のセーノカミの像は、他の道祖神と同じように、丸彫りの単体像であるが、その台座には「道祖神」と彫られている。セーノカミは子供の神様だということを大平のどの村落でもいう。子供がセーノカミの石像に乗ったりしても怒らないし、いたずらしても怒らないという。また疫病を防いでくれる神だともいう。

セーノカミの祭りは、他の地方と同様に、正月のドンドヤキである。ドンドヤキは正月の一日である。セーノカミの前や近くに各家からは正月の飾りを集めて積み上げて小屋を作り、男子がその小屋に集まって



写真17 南蔵のセーノカミ



写真14 政戸のセーノカミ

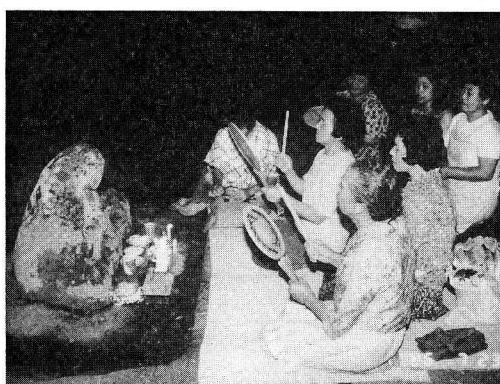


写真18 南蔵のオンボコンボ(1)



写真15 政戸のオンボコンボ(1)



写真19 南蔵のオンボコンボ(2) 終了後の歓談



写真16 政戸のオンボコンボ(2) 終了後の歓談

遊び、また、一四日に燃した。このときに、どの村落でもセーノカミの石像を火のなかに入れて燃した。そのためにセーノカミの石像が黒く焼き焦げているものがある。しかし、現在ではセーノカミの所に小屋を作ることもなく、またドンドヤキをしないところもある。

しかし、ドンドヤキは太平の各村落のセーノカミの祭りとしては中心ではない。太平のセーノカミは正月ではなく、夏に祀られる。どの村落でも夏の土用前後にセーノカミの前で行なわれる行事がある。特別な名称がなく、そのときの唱え言から「オンボコンボ」と呼ばれている。以下でいくつかの村落のオンボコンボの様相を見ておこう。⁽⁴⁸⁾

政戸のセーノカミは旧下田街道である県道沼津・原木線から集落に通じる道が分れる辻にある。その角はバスの折り返し場所になっており、広場といってよい。やはり丸彫り単体像である。そのセーノカミの前で、七月の土用に三日間にわたり行なわれる。行事の名称は単にオネガイと言うだけである。政戸の家々が順番に担当する三軒のネギバン(禰宜番)の家の女性が世話役となつて、セーノカミの前にゴザを敷き、ロウソクを立てる台を置く。日が暮れると、各家の女性たちが集まってくる。普通は家のなかの姑にあたる者であるが、主婦や若い嫁も参加する。各家から一人ずつ出るのが原則だからである。総勢二〇名余りがムシロの上に座つて、セーノカミの前に大量のローソクを点し、セーノカミに向かって経文を皆で唱える。中心になる人が数珠を繰り、また別の者が鉦を叩いてリズムをとる。唱える経文は①開経偈、②懺悔偈、③三帰依文、④「オンボ、コンボ、テザラシ、テンザラシ、ゴジソワカ」を一〇〇遍、

⑤十句観音経、⑥薬師如来真言(オンコロコロ、センダイ、マトウニソワカ)、⑦祈願、⑧回向文、⑨四弘誓願である。これらを全員が声を揃えて唱える。そして、終了後はその場所でネギバンの用意した漬け物をお茶受けにお茶を飲み、歓談する。これを三日間続ける。この行事は政戸の子供が病氣にかからないように祈るものだという。八月末にはオハタシといつて一晩だけ同じように集まり唱える。

南蔵のセーノカミは家々がとぎれ、そこから共同墓地のある山へ登る坂道が分れる辻の所にある。やはり丸彫り単体像である。この南蔵でも同じ時期にオンボコンボがセーノカミの前で行なわれる。セーノカミの前にゴザを敷き、そこに南蔵の女性たちが集まり、ローソクを点し、お題目を唱える。全員が団扇太鼓を叩きながら「南無妙法蓮華経」と題目を唱える。そして、題目を百回唱えた後、「オンボ、コンボ、テザラシ、テンザラシ、コビソワカ」と唱える。終了後はお茶とお菓子で歓談する。スイカなども出される。ここでも八月末にオレイマイリ(お礼参り)が行なわれる。南蔵の家々の多くが日蓮宗円教寺の檀家であるためと考えられるが、題目が唱えられていることは注目されよう。やはりオンボコンボもそれぞれの村落の個性、独自性が出ているのである。

東三分市は二つのセーノカミがあることは述べたが、それぞれ別々に地域別に祀っている。東三分市の東町のセーノカミは小平小学校の後の十字路の脇にある。ここも丸彫り単体像であるが、全体に摩滅が激しく、一体は頭を欠損している。七月のお盆過ぎに三日間セーノカミの前で行なわれる。方法は政戸とほぼ同じで、セーノカミの前にゴザを敷き、そ

ここに皆で座り、「オンボ、コンボ、テザラシ、テンザラシ、ゴジソワカ」と百回唱える。終了後、当番の用意したお茶、お茶菓子、果物等を食べ、お茶を飲んでお喋りをする。この行事の世話をする当番は三軒で、順番に勤める。夏の病気にかからないためにするのだといい、辻から中に病気が入らないようにするための行事だと東三分市の人たちは説明してくれる。

このようなオンボコンボが大平ではセーノカミの主要な行事となっている。セーノカミについては正月のドンドヤキよりもむしろこちらの方が意識されている。この行事は夏の土用前後に行なわれ、また八月末にはお礼とかオハタシといって同じことをする。オンボコンボは村落内の子供の病気を防ぐためだというが、これは明らかに夏の伝染病その他の

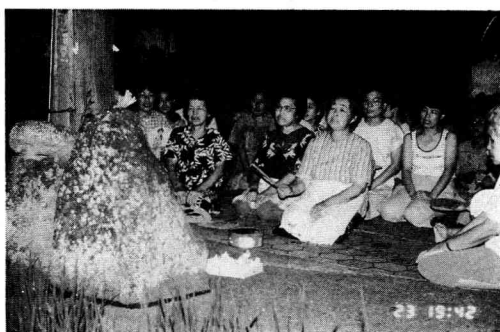


写真20 東三分市のオンボコンボ



写真21 三分市の天王さん（祭礼時）

危険な病気から守ろうとするものである。他の地方であれば、一般に天王さんを祀ること、夏の病気から守ろうとするのであるが、大平の各村落はそれをセーノカミに祈るのである。セーノカミは外から侵入してくる危険な霊や人間を防ぐ神であることは通説の通りであらう。したがって、セーノカミに夏の疫病の阻止を祈るのも不思議ではない。前節で見てきたように大平の開発以来の歴史は狩野川のもたらす水害との戦いの連続であった。それは、単に田畑が水に流され、土砂にうずもれ、あるいは水漬けになって、生産ができなくなる事態だけではなかった。水がもたらすもう一つの脅威は、水害後に来る疫病の流行だったことは間違いない。それを防ぐ行事をセーノカミ祭祀の中心に置き、しかもそれを今日でもなお毎年実行していることに、その重要性を示しているといえるであらう。

このように見えてくると、大平の民俗のなかでも顕著な存在であるツジギリとオンボコンボは共通した性格のものであることが判明する。いずれも村落領域の安全を守る行事である。しかも、特定の季節における危険に対処しようとする。要するに夏の危険な状態に陥りそうな自分たちの村落を守ろうとする祈願行事なのである。道切りをして、道路を通じて入ってくる危険な霊や人間を阻止し、村内を安全な空間にしようとする。そしてセーノカミの祭りで、どこからどのように来るかわからない疫病を防ごうとする。もともと子供の神としての性格をもっていたセーノカミに頼って、村落内の子供たちの安全を確保しようとした。

四 民俗の示す歴史

『大平年代記』を通して見てきた、大平の開発過程とその後の狩野川との戦いの連続が、大平の現在まで伝承されてきた民俗を作り出したと言えよう。道祖神祭祀自体は駿東から伊豆に大きく展開しているものであり、大平もその分布地域内の一村落到過ぎない。また道切り行事も全国的に行なわれているもので珍しいものではないし、大平のように札を笹竹に挟んで立てることもごく一般的な姿である。しかし、その道祖神祭祀や道切り行事を夏に重点を置いて行なっているのは必ずしも一般例とは言えない。大平が開発形成過程で背負った条件がこのような特色ある領域をめぐる民俗を作り出し、維持させてきたと言ってよい特色なのである。そして、その歴史の重みが現在なお近隣の諸村落では見ることのないほどの熱心さでこの二つの民俗を保持しているのである。同種の行事は周辺の村落で見るとは珍しい。

民俗は歴史的に形成され、保持されてきたものであることは言うまでもないことである。その歴史はもちろん日本列島全体を単位とする歴史という面もあるが、そのみを根拠に比較研究とか重出立証法という資料操作法で処理してしまうことは明らかに間違いである。その地域の民俗の指示する歴史はその伝承母体としての地域の歴史である。個性ある村落の歴史が個性ある民俗を生み出し、保持させてきたのである。⁽⁵⁰⁾ 民俗の地域差と地域性はそれを問題にし、明らかにする研究課題であった。

大平の民俗には、人々が日常的には意識しない歴史が表出されている。

付記 この長期にわたる大平での調査に際しては多くの方々のご親切なご配慮をいただいた。とくに、地元の皆様には多大のご迷惑をおかけした。また、調査に際しては共同研究員の方々や静岡県史編さん委員会民俗部会の皆様ともご一緒に大平を訪れることが多かったが、その過程で種々ご教示いただき、また調査成果を参照させていただいた。本文の記述にも少なからずそれが反映している。ここに記して感謝申し上げます。

なお、当初の計画では以上のような歴史的蓄積の上にある大平の近年における急激な変貌過程を記述し、そこに示された特質を併せ考える予定であったが、諸般の事情で出来なかった。別の機会に果たしたい。

注

- (1) 柳田國男の周圈論の特質とその問題点については別に「方言周圈論と民俗学」(『日本民俗学方法序説』一九八四年、所収)で論じた。
- (2) 福田アジオ「初期柳田國男の研究と現代民俗学」(『思想』七四七号、一九八六年)。
- (3) 『大平年代記』(沼津市立駿河図書館編『大平年代記 付大平旧事記・大平道之記』沼津資料集成八、所収、一九八一年)。
- (4) 静岡県教育委員会県史編さん室編『大平の民俗―沼津市―』(静岡県史民俗調査報告書第三集)一九八七年。
- (5) 静岡県駿東郡役所編『静岡県駿東郡誌』一九一七年、一二三四頁。
- (6) 『駿河記』は駿河島田の桑原藤泰(伊右衛門)が個人的努力で文化一五年(一八一八)に完成させた駿河一國の村別の地誌である。
- (7) 足立敏太郎校訂『駿河記』下巻、五五一―五五三頁。

- (8) 『大平年代記』には元禄一四年の所で「此時ニ大平大小二百七拾四軒、尤水呑ミ、地借リホハ不入候。人数千八百四拾三人」(前掲『大平年代記』五七頁)と記している。ただし、ここで水呑、地借の表現があるのはやや時期的に見て早いので『大平年代記』の記載をそのまま信じることはできない。
- (9) この絵図の分析は塚本学「大平村下絵図から」(『民俗の地域差と地域性—中間報告—』一九八七年、四三〇四七頁)で行なわれている。その要旨は前掲『大平の民俗』にも記述されている。
- (10) この貴重な資料が友野博氏の多大な努力によって活字化され刊行されたことに感謝しなければならない。
- (11) 友野博「『大平年代記』解題」(前掲『大平年代記 付大平旧事記・大平道之記』五頁)。
- (12) 『大平道之記』はやはり著者不明であるが、大平の名所案内記である。村出身の医者が道連れになった旅の僧を案内して大平を巡る形式で記述されている。その文中にたとえば「最早元和四年ヨリ今明和五迄ヲ百五十年立申ナリ」等と書かれている。『大平道之記』は『大平年代記 付大平旧事記 大平道之記』(沼津資料集成八)に併載されている。
- (13) 友野氏は第一次の成立を享保年間、第二次の成立を安永年間としている(友野前掲「『大平年代記』解題」五頁)。なお、友野氏が『大平道之記』の成立を明暦五年としているのは何かの勘違いであろう。
- (14) 前掲『大平年代記 付大平旧事記・大平道之記』八六頁。
- (15) 福田アジオ「歴史民俗学的方法」(『日本民俗研究大系』第一巻、一九九一年所収)において、民俗を記述した文字資料の価値とそれに基づく研究の意義について述べた。
- (16) 前掲『大平年代記 付大平旧事記・大平道之記』一〇頁。
- (17) 『静岡県史料』第一輯のなかに星谷文書として二点が収録されている。最も古い文書は天文六年の北条氏綱の制札であり、次が天文二十一年の今川義元の知行充行判物である。戦国期の大平の置かれた位置がうかがえる文書群である。
- (18) 星谷才蔵は慶長一九年に常陸国久慈郡、茨城郡で二百石の知行を徳川家康から与えられている(星谷文書十九、前掲『静岡県史料』第一輯、六〇四頁)。このような星谷氏の性格については高橋敏「初期代官江川家につ

- いて」(『史潮』一〇四号、一九六八年)を参照。
- (19) 前掲『大平年代記 付大平旧事記・大平道之記』一〇頁。
- (20) 同書一〇頁。
- (21) 同書一二頁。
- (22) 同書一二頁。
- (23) 同書一四頁。
- (24) 同書一四頁。
- (25) 同書一七頁。
- (26) 同書三三頁。
- (27) 同書三五頁。
- (28) 同書四五頁。
- (29) 同書一一頁。
- (30) 同書一一頁。
- (31) 同書一二頁。
- (32) 明治以降においても狩野川対策は大平にとって重要な課題であった。とくに水害から逃れるために、狩野川の中流の江間村の地点で西側の山を抜いて海へ流す放水路を作る運動に各村は奮闘したが、その一員に大平村は常に存在した。この関連史料は伊東愛治郎編『狩野川治水史料集明治編』一九六九年を参照。
- (33) 前掲『大平年代記 付大平旧事記・大平道之記』三九頁。
- (34) 同書三九頁。
- (35) 同書五三頁。
- (36) 同書五七頁。
- (37) 同書一〇頁。
- (38) 同書一二頁。
- (39) 同書一五頁。
- (40) 同書一五頁。
- (41) 同書三五頁。
- (42) 同書四三頁。
- (43) 同書三五頁。
- (44) 同書二二―二四頁。
- (45) その代表的なものとしては、『大平年代記』の記すところによれば、享

保九年(一七二四)の山の入会をめぐる争いがある。これは大平が大きく西方と東方に分れて、名主以下の村役人が置かれていたことに根拠を置いて、東方の三分市、政戸の者が西方の領域と主張する大井山に草刈に行つたところ、阻止された事件である。領主への訴状では、単に東方、西方とのみ出てくるが、『大平年代記』はその当人たちを三分一、正戸の者として記述している(同書六七〜七〇頁)。

(46) 大平のツジギリについてはすでに中間報告でも記述している。福田アジオ「村落空間と村境」(前掲『民俗の地域差と地域性―中間報告―』三八〜四二頁)。

(47) 伊豆から駿東にかけての道祖神像は、基本的に丸彫り単体像で、姿は笏を持った神像である。東の相模に入ると同じ単体でも僧形である。このような形状の地域差については、他の様々な形態と共に武田久吉「形態別に見た道祖神」(『日本民俗学のために』第十輯、一九五一年)が概観している。

(48) ここで紹介した以外の村落のオンボコンボについては、前掲『大平の民俗』一七七〜一八一頁を参照されたい。

(49) 大平の三分市ではさらに天王さんも祀っている。これは東西で一緒になつて祀っており、七月一日を祭日としている。普段は社屋もないが、祭りに際してオフクラと呼ばれる祠を据えて、その周囲を麦稈でふいて覆う。そして毎日灯明を当番制で各家が点しに来る。祭日にはキュウリその他の供物を供える。また子供の神輿が練り歩く。そして、九月一日の風祭りまでそのようにして社を置き、途中で何回かの行事がある。風祭りが終わると、また解体してしまう。この天王さんは牛頭天王で、大平で疫病が流行した天明四年(一七八四)に北条(静岡県田方郡韮山町北条)から勧請したものと伝えられているが、むしろ『大平年代記』が慶長一五年(一六一〇)のこととして記す「原一家之鎮守を三社所ニ建立。是より原一家之鎮守之内、牛頭天王祭礼六月一日ニ小麦之餅を以御供ニして祭ル」(同書三九頁)に対応するものであろう。

(50) 同様に、近世成立期の村落の置かれた状況が独特の民俗を形成させ、今にそれを保持させていることを南伊豆の山随祭りを例に論じたことがある。福田アジオ「村落の統合と御霊信仰―伊豆加増野の山随祭り―」(『静岡県史研究』第三号、一九八七年)。

The World of Folk Customs in Ôhira, Numazu City

FUKUTA Azio

This paper reports the results of investigations continuously carried out at Ôhira in Numazu City, Shizuoka Prefecture, which is one of the fixed investigation points of this research project.

The investigation was conducted with the presumption that the individuality of an area should have been strongly influenced or formed by its people's historical consciousness of the area; in other words, people's consciousness of their society should have created their history. The author aimed to approach the world of folk history, including not only history as historical facts, but also history as it exists in people's consciousness, or sometimes the fictional world of created history, from the viewpoints of both written documents and actual folklore. Fortunately, there exists at Ôhira an interesting historical document compiled by its people, which is a chronicle appropriate for clarifying the above problem. It was because this chronicle exists that Ôhira was designated for investigation. Based on the chronicle, the investigation focused on an examination of the relationship between its content and the many actual folk customs. Almost at the same time, another investigation was carried on in parallel on the folk customs of Ôhira, the results of which were compiled and published as a monographical investigation report (Shizuoka Prefectural History, Folk customs Investigation Report entitled "Folk customs of Ôhira"). In this paper efforts have been made to avoid duplicating the above report, and the content has been limited to focus on an understanding of the characteristics of the village; so the present report does not describe the folk customs of Ôhira in comprehensive detail.

The folk characteristics of Ôhira may be understood as follows; Its process of development and subsequent continued struggle against the Kano River created the folk customs which have been handed down to the present. The worship of Dôsojin (the guardian deity at the village borders) itself has developed widely from Eastern Suruga to Izu, and Ôhira is just one village within this area of distribution. The Michikiri (boundary-marking) ceremony, which has spread nationwide, is not rare, either. The custom of erecting a charm clipped between a split bamboo stalk, as seen at Ôhira, is also a normal style. Nevertheless, it is not usual for these religious services toward Dôsojin and Michikiri ceremonies to be held mainly in the summer season, as in the case in Ôhira. It can be considered that the circumstances under which Ôhira has developed and formed have created and maintained the characteristic boundary-marking folk customs described above. The weight of history may still preserve these two customs with a zeal that cannot now be seen in neighboring villages.